

基本構想

第 1 章

小笠原村の将来像

1) 将来像

心豊かに暮らし続けられる島

現代社会は、情報やモノがあふれるなか、人々の生活は飛躍的に便利になっています。

特に都会では、多くの人々が生活するため、娯楽・交通・医療・福祉など、さまざまなモノやサービスが集約され、便利で快適な生活を享受することができます。

その一方で、自然と触れる機会が少なかったり、何事にもスピードが求められたりするなど、生活の中で安らぎを感じにくく、人と人との交流も疎遠になりつつあります。

本土から1,000km離れた小笠原村に目を向けると、海底光ケーブルの敷設などにより本土との情報格差はある程度なくなったものの、依然としてどうしても埋められない時間的・距離的な制約があるなか、都会と同じように何不自由ない生活を送ることは限界があり、一定の不便さは受け入れなければなりません。

一方で、自然を身近に感じられる環境や、本土とは異なる生活リズムの中で、人と人との交流は濃密であり、島ならではの豊かな生活を送ることも可能な環境にあります。

このようななか、むらづくりの視点としては、村民一人ひとりが超遠隔離島に暮らすうえでの制約を理解したうえで、自立する力と互いに支え合う力を身に付け、強いコミュニティを形成するとともに、さまざまな環境の変化にきめ細かく対応しながら、暮らし続けるために必要な環境整備や産業の活性化などを進めることで、安心して安定した暮らしの基礎を築くことが重要です。

また、大自然に囲まれた生活や、ゆったりとした時間の流れを楽しめる生活など、ここにいるからこそ実践できる生活の豊かさを大切にします。

そして、制約があるなかでも、こうした豊かさを大切にしながら、村民と行政が一体となって、創意工夫をし、小笠原村ならではの「暮らしやすさ」を探求していきます。

さらには、小笠原村を訪れる人々にも、こうした豊かな自然の恵みを享受する暮らしの魅力を感じてもらい、また来たいと思ってもらえるようなサービスを提供し、村の活力を生み出します。

こうして、人と人とのあたたかいつながりのもと、人と自然が共生し、活力に満ちた地域社会を実現することで、小笠原村は小さくともキラリと光る、唯一無二の存在となることが可能です。

そして、「暮らしやすさ」に支えられた小笠原村ならではの暮らしの魅力を、一步一步着実に高め、村民すべてが将来に向かって夢や希望をもち、『心豊かに暮らし続けられる島』となることを目指します。

…… ● ● ● 未来日記 ● ● ● ……

約 30 年後の将来像について多くの方と共感できるように、小笠原村の暮らしをさまざまな登場人物の視点で描いています。



働き世代 (50代)

最近、村の中を歩いていると、むらづくりについて、立ち話して盛り上がっている姿をよく見かけます。昔じゃ、そんなこと考えられなかったけど、いろいろな情報が入ってくると、自然と話せるようになるものですね。



子育て世代 (30代)

この間、子どもに学校の勉強のことを聞いてみたら、習ったこと以外の知識や自分の意見をちゃんともっていて、びっくりしました。どうやら、私の知らないところで、地域の方々にも育てていただいているみたいです。



高齢者 (70代)

毎日、近所のみんなで集まって体操をしながら、話をすることで日々の不安は解消されますね。本当に困ったときも、診療所の先生が、他所の先生にも相談しながら、しっかりと対応してくれるので安心です。



高校生 (10代)

この間の大きな地震と津波には、驚きました。でも、村民も観光客も一緒にスムーズに避難することができまし、避難所では水も電気も使えました。津波被害も最小限に抑えられ、内地の大学に通うお兄ちゃんも飛行機ですぐに帰ってきてくれて、家族全員集まったらほっとして、少し力が抜けました。



観光客 (40代)

今日、街を散歩していたら、固有の動植物にたくさん出会えて感動しました。さらに島の子どもたちが、丁寧に固有種の解説までしてくれました。島全体で希少な生態系を理解し、外来種を持ち込まないなど、環境に配慮したライフスタイルが確立しているからこそですね。



観光客 (20代)

のんびり散歩しながら、途中で出会った村の人たちとお話をしていたら、いつの間にか夜になっていました。こんな素敵な時間の過ごし方は、何年ぶりだろう。聞いたところによると、本土では見たこともない食材やおいしい料理が食べられるお店があるらしい。旅の土産話でも仕入れにいられます。

2) 将来人口

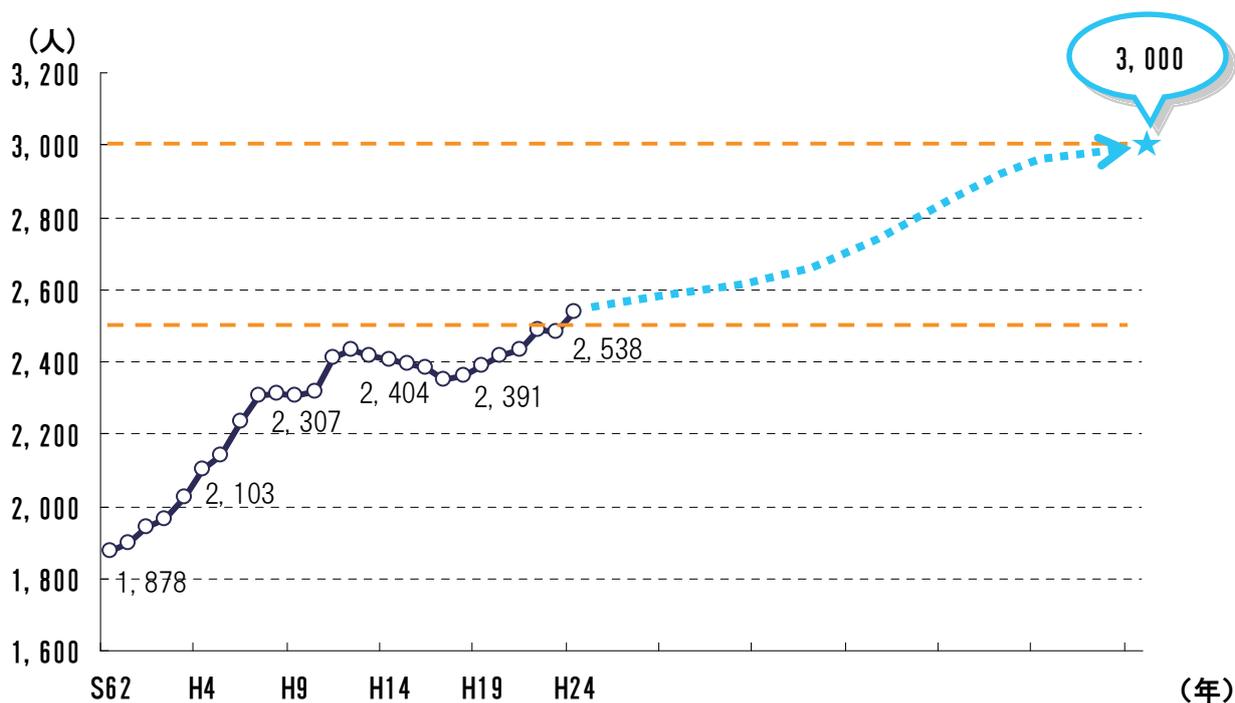
地域の生活を支える活力・地域の賑わいの創出のためには、一定規模の人口が必要であるため、超長期の将来人口としては、復帰当初から目標としてきた3千人を目標として設定します。

ただし、その一方で、世界自然遺産にも登録された貴重な自然と共生する小笠原村ならではの暮らしを続けるためには、急激な人口増加は望ましくありません。

また、現状では、人口増加に対応する産業や医療・福祉、居住環境などにおける受け皿を十分に確保しなければならないことに加え、財政状況も決して豊かではないなか、村の経営資源の投資においても必要性を見極めながら対応しなければならないこと、さらに、私たちの生活を支える基盤である水源や土地にも限りがあることなど、課題も多く抱えています。

そのような観点から、超長期の将来人口としての3千人は上限人口とも想定できます。

以上から、ゆるやかに一步一步成長を続けられるよう、短期的には転出の抑制や出生数の増加を支える行政サービスを充実させつつ、『ゆるやかな人口増加』を維持することを目標とします。また、超長期的には新たな産業振興策の展開、居住環境の整備などの多様な取り組みを組み合わせることで、復帰当初から目標としてきた3千人に近づけることを目指します。



資料：住民基本台帳（平成24年までは、各年1月1日現在の実績値）

3) 土地利用の方針

小笠原諸島は、太平洋上に散在する 30 余の島々からなり、その総面積は約 104 km² と狭く、急峻な地形で平地が少ないうえ、その大半が国立公園や森林生態系保護地域に指定されており、都市生活を行うために活用できる範囲は非常に限られています。

そのため、貴重な自然環境の保全と活力を生み出す生活環境の確保を両立するためには、限られた利用できる土地を有効に活用していく必要があります。

本計画では、小笠原諸島振興開発計画の土地利用計画を基本として、主要な島ごとに、土地利用方針を次のとおり定めます。

【父島・母島】

守るべき地域（自然保護地域）と積極的な利用を可能とする地域（集落地域、農業地域、その他地域）を設定し、守るべき地域は規制のもと、その環境を厳格に守り、積極的な利用を可能とする地域はしっかりと利用のルールを定めたうえで、その環境保全を図るとともに、その時々々の状況と将来予測を踏まえ、最適な利用方法を選択します。

●自然保護地域

小笠原諸島の優れた自然景観地域、地形地質の面で保全する必要のある地域及び学術上貴重な動植物が生息する地域などについて、自然保護地域として保全・保護を図ることを基本とし、保全と適正な利用の促進を図ります。

●集落地域

既存の集落地域については、快適で利便性の高い居住環境の形成や、良好な街並みの形成に努めるとともに、点在する遊休土地の流動化を促し、公園や緑地などの整備も含めて快適な生活空間の創出に努めるなど、有効利用に積極的に取り組んでいきます。

●農業地域

農業地域内の農地の保全及び農業基盤の整備を重点的に促進するとともに、未利用地については、農地としての利用を促進します。

●その他地域

現状では、特に利用方針を定めていない地域であり、土地の有効活用を図るため、土地の利用に関する検討を行い、周辺との調和を図りながら、最も適した土地利用への誘導を図ります。

また、今後の人口増加や村の活性化を図っていくため、自然環境との調和に配慮しながら、既存集落地域との一体性をもった集落地域の拡大も、本地域において検討します。

【硫黄島】

小笠原村の行政区域として、国、東京都などの関係機関との調整を図りつつ、歴史的経緯を踏まえて、平和の象徴となるような利用のあり方を推進します。

【沖ノ島・南島】

日本の最南端と最東端の国境を担う島であることはもちろん、海洋資源の開発・利用、海洋調査などの活動の拠点としても重要な役割を担う島であるため、日本の国益につながる利用について、小笠原村として協力します。

第 2 章

むらづくりの目標像

1) 基本理念

① 自主性と自立性の確立

② 互助と連帯感の醸成

この理念は第1次小笠原村基本構想から引き継がれてきたものであり、旧島民・新島民・新々島民など、さまざまな人生の背景を有する人々が交流しながら新たなコミュニティをつくりあげている現代においても、大切な理念であるため、第4次小笠原村総合計画においても継承します。

2) 取り組み姿勢

基本理念のもと、むらづくりを進めるための3つの取り組み姿勢を示します。

英知を集めよう

小笠原村は、社会・経済活動上の不利条件を多く抱える地域ですが、一方で、世界に誇れる自然環境や貴重な海洋資源に恵まれており、国内外を問わず小笠原村に関心のある有識者がたくさんいます。また、観光客や本土からの移住者との交流の中で、さまざまな気づきをもたらえることもたくさんあります。

村民の知恵を活かすことはもちろん、有識者や観光客、新たに小笠原村に移住してくる人々などとの交流の中で世界中の英知を集め、将来像を実現するための方法を探求します。

いい汗をかこう

小笠原村の財政規模は小さく、多様化・複雑化する村民（社会）ニーズのすべてに、行政資源のみで対応していくことは困難です。そのようななかでは、費用を最小限に抑える工夫や、公共サービスを経済サイクルに組み込むことによる資金の創出などにより、公共サービスを村全体で支えていく必要があります。

また、この計画で示されている将来像は一足飛びでかなえられるものではなく、小さなことから着実に行動に移していくことが必要です。

地域で暮らし、働く、村民・事業者・行政それぞれの主体が自らの役割を自覚し、責任をもって将来像実現に向けた取り組みを着実に実行していきます。

心を合わせよう

小笠原村は、国土形成のさまざまな視点から極めて重要な位置にあり、村としての持続的な経営が必要となりますが、条件不利地域である小笠原村の維持には、外からの支援・応援も欠かせません。

そのため、まずは、地域づくりの推進役として、村民自らが、自分たちの村は自分たちで支えるという意識を共有し、新しい公共を形成していく必要があります。

村民が自らががんばる意思と行動をきちんと示したうえで、国民の皆さんにも小笠原村の特殊性への理解と協力を求め、心をついに、国民全体にとって重要な価値をもつ小笠原村を次代に継承できるよう、守り続けていきます。

3) 分野別目標像

環境共生 : つながりが豊かな暮らしと豊かな自然を紡ぐ村

「つながり」とは、村民が、自然を適切に利用するなかで自然との距離感が縮まり、自然の果たしている役割や人々の暮らしにもたらず潤いを肌で感じることです。

「つながり」とは、村民が、自然との関わり方や暮らしの価値について、それぞれの価値観を認め合い、尊重し合って暮らす姿が、その暮らしに触れた人々にも伝わっていく「人と人とのつながり」です。

こうしたつながりを通して、世界に認められた人類共通の宝である豊かな自然環境が受け継がれていく村を目指します。

環境共生分野の村民の将来生活像

- 自然を大切に利用することで、村民も来島者も自然のもつ価値、役割、重要性などを肌で感じ、自然に対する「思いやり」が育まれている。
- その思いやりが自然への負荷を低減するライフスタイルにつながり、その暮らしに触れた来島者も島の暮らしのあり方を正しく理解している。
- そして、小笠原諸島の貴重な自然を人類共通の財産として後世に引き継いでいくために、小笠原村に関係する人々が一体となって継続的に保全活動などに取り組んでいる。

都市・防災 : しなやかな強さが暮らしの安定を守る村

「しなやかな強さ」とは、水やエネルギー、土地などの限られた資源を村民の暮らしに有効に活用するため、将来を予見しさまざまな工夫によって弾力的に対応することです。また、社会・経済・技術などの環境の変化を即座に捉え、臨機応変に対応する姿勢も表しています。

「しなやかな強さ」とは、技術の限界を超えた災害に対し、災害そのものは防げなくても、未然に予測し、対策を行うことで、人々の生命を守る対応の柔軟さと災害に屈しない強さです。

こうした、環境の変化や自然の脅威に抗うのではなく、受け止め、いなす、しなやかな強さによって、村民の安定した暮らしが守り続けられる村を目指します。

都市・防災分野の村民の将来生活像

- 離島の制約や可能性を十分に認識し、自然への負荷を低減する工夫や、資源利用を最適化する工夫を凝らしながら、島にも人にも優しい安定した生活を送っている。
- 本土との高速交通アクセスの手段が確保され、村民のいざというときの不安が解消されている。
- 村民の多様な暮らし方を受け止める環境が整えられ、島での暮らしの幅が広がっている。
- 日頃から村民自らがその生命と財産を守る知識を身に付けるとともに、さまざまなリスクを想定した対策が講じられ、災害などの非常時においても、柔軟な対応により人々の生命が守られている。

産 業 : 特色ある産業で人々の心を潤す村

旅人の「心を潤す」のは、ここでしか味わえない、本物の自然、本物の暮らしに触れ、あたたかなおもてなしの中で過ごす、ゆったりとした癒しの時間です。

村民の「心を潤す」のは、村民の暮らしの基礎となる地域に根付いたなりわいと、家庭の食卓に色を添え、安心で健康的な食事を支える新鮮な野菜や魚などの地産物です。

人々の「心を潤す」のは、どんなときもどこにいても、遥かな島小笠原村の特別感を感じさせてくれるモノやサービスです。

こうした小笠原村ならではの魅力をさらに高め、日本中の人々の心を潤す感動を提供し続ける村を目指します。

産業分野の村民の将来生活像

- 観光客が、豊かな自然・貴重な生物との触れ合いや村民によるあたたかなおもてなしの中で、島の暮らしの魅力を感じ、旅の始まりから終わりまで、ゆったりとした癒しの時間を楽しんでいる。
- 温暖な気候や広大な海洋によって育まれる農水産物やそれらを利用した商品が小笠原村を訪れる観光客を中心に日本中の人々に提供されるとともに、村民は村内でとれた新鮮な地産物を購入でき、地域の恩恵を受けた豊かな食生活を送っている。
- 自然の恵みや文化などに根付いた小笠原村ならではのなりわいが広がり、村民が日々の仕事にやりがいを感じながら、心豊かに暮らしている。

医療・福祉 : こまやかさが暮らし続けられる安心を支える村

「こまやかさ」とは、村民一人ひとりが日頃から自分の健康に気をつけながら生活を送るとともに、村民どうしで情報を共有し見守り合う日々の心くばりのことです。

「こまやかさ」とは、医療・福祉を担う専門職を適切に配置するとともに、業務の遂行に必要な支援を常時受けられる体制を構築することにより、多角的な診断やサービスの提供を可能とし、老後や介護が必要となっても安心して暮らせる環境を整えるきめ細かい対応のことです。

このように日頃からのこまやかな対応によって、健康を保ちやすい環境や、病気になっても早期に発見しやすい環境を整え、安心していつまでも暮らし続けられる村を目指します。

医療・福祉分野の村民の将来生活像

- 村民一人ひとりが、日頃から運動や食生活などにおいて健康に気を配った生活を送るとともに、定期的に健康について学ぶことや自分の健康状態を知ることを心がけている。
- 村内の医療・福祉機関も村外の機関の協力を得ながら、多様で時代とともに変化する医療・福祉のニーズへきめ細かく対応し、多角的な医療提供、包括的な福祉提供を行い、村民の健康的な生活を支えている。
- こうした関係機関のきめ細かい対応のもと、村民は、子育てや健康、介護などに関する悩みをいつでも専門家や地域のリーダー的存在の村民に相談することができ、同じ課題を抱える村民どうしで日頃から集まって情報交換できる環境の中で、社会的な不安を解消し、支え合いながら、村内でいつまでも安心して暮らし続けている。

教育・文化 : 学び合う心が自立する力を育てる村

「**学び合う心**」とは、小笠原村の自然・風土などに直接触れる体験を通して郷土を理解することです。

「**学び合う心**」とは、子どもたちが地域における学習やスポーツの場において成長に必要なさまざまな経験をし、心身ともにバランスのとれた成長を遂げるとともに、大人たちも、新たな世代をあたたく見守り、知識を伝え学び合うことができるようになることです。

「**学び合う心**」とは、村外の人々との親しい関係を築くなかで、小笠原村にはない価値を知るとともに、小笠原村にしかない価値に気づき伝えていくことです。

こうした縦や横のさまざまな学び合いを通して、共に相手を思いやり、共に高め合うことができる子どもたちを育み、村民が自ら考え、行動し、自立できる力を育てる村を目指します。

教育・文化分野の村民の将来生活像

- 子どもたちは、自ら進んで学び、小笠原村の自然・風土などに直接触れる体験を通して郷土をよく理解するとともに、それを人々に伝える力も身に付けることで、小笠原村特有の文化を継承している。
- 子どもたちは、多くの物事を経験することができる環境の中で、自らの可能性に気づき、その可能性に向かって進む力を身に付けており、大人たちは、経験を活かした特技や知識などを地域の中で教え学び合うとともに、それらの価値や楽しみを子どもたちにも積極的に伝えている。
- 村民は、近い世代との交流・世代間の交流・村外の人々との交流を深めるなかで、多様な価値観に触れることで、自己を知り、共に認め合いながら豊かな人生を送っている。

地域経営：信頼に応え進化し続ける村

村民の「信頼に応える」とは、村民の日々の暮らしの舞台である地域を魅力あるものとし、より健全な状態で未来の村民へと引き継ぐことです。

国民の「信頼に応える」とは、国民にとっての小笠原村の存在意義と特殊性を理解し、国益に貢献し続けることです。

このように村民や国民から小笠原村に向けられる信頼に応えるために、地域を経営する村民、行政、その他すべての関係者が互いを理解し合える関係を築きながら、地域の将来を見据えて着実に進化し続ける村を目指します。

地域経営分野の村民の将来生活像

- 村民どうしが、それぞれの知識や経験を提供し合いながら世代を超えて協力し、積極的に地域づくりに取り組んでいる。
- そのために、行政は、村民の声に耳を傾けることで、地域課題に迅速かつ柔軟に対応し、広域的な連携も活用しながら、効率的・効果的な行政運営を行っている。
- そして、村民・国民の宝である小笠原村を次代に引き継ぐため、小笠原村に関わるすべての人々が互いの役割をしっかりと認識し、一体となって地域づくりに取り組んでいる。